

「松原遠く消ゆるところ……」。
 先日、法事の為、久し振りに下浜に帰って、我が目を疑った。文部省唱歌「海」の一曲そのもののあの美しい松林が、立ち枯れて、墓標の如く林立している。その異様にして索漠たる風景。犯人は松喰虫とのこと。一体全体、行政は何をしているのか。「怠慢」の二字が頭をよぎった。

極く最近、ある病院の医師が、家族の要請で患者のレスビレーターを外したら、書類送検されたことが、或る新聞の第一面トップ記事に載っていた。言わないことではない!!

ポラリス Polaris

十数年前、私は、長寿科学振興財団の「老年者のQOL及びターミナルケアに関する研究」の班長として、老年医学の専門家五名と共に、三年に亘り、この研究に従事した。その中の項目の一つの「自分自身・配偶者・両親が老年になって不治の病に罹り、植物状態になった時、延命処置を望むか」に就いてのアンケート調査を、可能な限り広い年齢層と領域の人々を対象に、実施した。「イエス」の答えは、自分自身に就いては

九%、配偶者・両親でも、二〇%台という低さであった。此の成績を基に、私は、此の問題は、国民全員の課題として、十年程時間をかけて討論、コンセンサスを得る必要を痛感し、その旨、答申、提言した。具体的には、健康保険証に、延命処置希望の有無の欄を設け、50歳になったら記入する。その上で延命処置の最終決定には、地域毎に設けた第三者機関が関わり、全員一

「松林が消えた」



大友 英 一 (昭和20卒)
 (社会福祉法人浴風会病院院長
 財団法人ほけ予防協会会長)

然し、終末期の生々しい医療現場に長年携わって来た者としては、回復の見込みのない患者への延命処置の為に、膨大に膨れ上がる医療費の問題や、患者に機械的に水分を注入するだけの繰返しに、張合をなくしてやめて行く看護師の問題等、厳しい現実から目をそむけることは不可能なのであって、それ故の切実な提言なのである。勿論、これら一連の提言は、日本老年医学

致、或いは多数決で決める。延命処置決定後の費用は、全額自己負担とする。
 延命処置停止と決定してからは、レスビレーターを止める、点滴の針を抜かず、徐々に酸素を少なくするメニュー、徐々に栄養分を減らすメニュー等を専門家が予め作っておき、これを使用する。
 愛する肉親には、譬え、植物状態になっても、此の世で息を置いて欲しいと願うのは、人間本来の感情である。

会総会の特別講演に於いても、切々と訴え、その内容は老年医学会雑誌にも掲載されている。そして、その他の医学雑誌にも、機会のある毎に、繰返し主張して来た。然るに、その反響は如何?
 数年前、浴風会を視察に来た厚生労働省の老健局長と昼食を共にした。老健局長と言えば、老年医療行政の最高責任者である。私は老年医療の現場従事者が、如何に、一方で空しい思いを抱きつつ、血の滲む努力をしているかを知

って貰う絶好の機会と捉え、次の二つの話題を提供した。(その一)「老年者のQOL及びターミナルケア」の私達の研究結果。(その二)「認知症発病を一年遅らせれば、医療費などが年二千八百億、二年遅らせれば、その倍節約出来る。故に予防に力を入れるべき」(或る国立機関の二年前の研究結果)。ところが、驚くなかれ!!彼は二つ共、全く知らなかったのである。少なくとも視察前の一夜漬けでもよいから、部下に資料を揃えさせ、頭に入れて臨むのが、その立場にある者の最低限の良心ではなからうか。

役人の不勉強、無責任の唾然、茫然ぶりはこれにとどまらない。「審議会」と言う名の行政側の隠れ蓑に群がる肩書き欲しさの御用学者とのナアナアのもたれ合いで、腐敗は、さらに度を深め、挙げ句、公立法人への天下りを繰返す毎に、庶民から絞り取った血税を、巨額の退職金として、自分達の懐に吸い上げる。斯くして、民は細る一方、官は太る一方。
 墓場の如き故郷の無残な松林の姿は、民の嘆きと怒りの象徴そのものに思えてならなかった。

天上天下

大江健三郎が東大のフランス文学科に進んだのは、主任教授の渡辺一夫に憧れたことが最大の理由であった。その渡辺博士が昭和五十年に亡くなったとき大江は大きな衝撃を受けたが、翌年、メキシコに向かう飛行機の中で、「陽に輝く雲と海面を眺めて、この自然のうちに、原子となつた渡辺先生の肉体が遍在する」と考えた。それは、深いところから自分が治癒される大きい解放感の経験であった」と述懐している。▼最近、新井満の訳詩・作曲になる「千の風になつて」がいろいろなところで歌われている。一番の歌詞だけ紹介してみたい。「私のお墓の前で泣かないでください/そこに私はいません/眠ってなんかいません/千の風に/千の風になつて/あの大きな空を/吹きわたっています」▼一読して、大江の感慨とよく似ていることに気づかせられるが、この歌の原詩はもともとアメリカの先住民のものだという。キリスト教や仏教とも異なる世界観で興味を惹かれ、この歌行にしみじみと浸る日本人の死生観にもおのずからにして思いが及ぶ次第である。